

カスタネット通信8月号は言語聴覚士の臨床実習についてお知らせしました。9月号では、臨床の場に入ってから学びについて書いてみました。発音を治す訓練について広くご理解いただくための解説も試みました。お読みください！

『ことばの教室』の先生方との交流



神奈川県には古くから（というのはだいたい1970年代と思われる）、病院や療育施設で小児の臨床にあたる言語聴覚士（以下STと略記）と小学校の特別支援教育の一翼を担う「ことばの教室」「きこえの教室」の先生方が共に学ぶ勉強会がありました。1～2か月に1回（そのころ土曜は出勤日でしたから日曜午前が殆どだったのではないかと思います）横浜のいずれかの会場を借りて集まり、持ち回りで事例報告を行い皆で討議するのです。外部講師を招くこともありましたが、基本はあくまで会員同士の学び合いの場でした。指導経過を振り返り配布資料を作って発表するまでの作業は膨大でしたが、先輩方から貴重な助言を得ることができ、また、ほかの方の発表から学ぶことも多くありました。よく顔を合わす訳ですから親しい交流が生まれ、就学前から就学後への切れ目ない連携に役立ち、また就学前の施設で働くSTにとっては、小さな子どもたちだけ見ていては見通せない就学後の種々の課題を知る機会ともなっていたのです。

STが1997年に国家資格となり、日本語の教科書も現れてくると、勤務時間外の自主的な勉強会に参加してまで学ぼうとする人は少なくなりました。教科書を読むと分かった気持ちになります。でも皆さんも経験なさっていると思いますが、見る（読む）とやるでは大違い。実際の患者さんは実に多様で、教科書的なハウツーは役立つことの方が少ないのが現実です。ですので、養成校の学生にとって臨床実習は非常に貴重な勉強の機会です。が、仕事を始めて患者さんに出会ってからの学びは、さらに実務的で重要と感じられます。

私は年に何回か、ことばの教室の先生方に『構音障害とその指導』について講義をしてほしいと頼まれることがあります。構音障害つまり発音が不明瞭なお子さんの指導です。先生方が指導に難渋している事例報告をもとに、時には直接そのお子さんにお会いし対応を検討した上で、指導法全般について講義をします。横浜国立大学などへの内地留学で専門知識を学ぶ機会があったパイオニアの先生方と異なり、最近通常級から直接ことばの教室に配属される先生が多いため、音声学や発話のしくみから講義を始めます。鏡を前に口の動きを観察したり指導手順を実演したり。教科書のままに用いていた手法の根拠を知り、指導法を修正なさる先生もあります。種々の事情で就学後に構音障害を残すお子さんは多くあり、ことばの教室の先生方への期待は大きいと感じます。たった1回の研修会の意義は限られますが、依頼がある限り出かけていき、STの臨床を通じて学んだ知識や技術を、私なりに先生方に伝えていきたいと思っています。新人時代とは異なる大切な交流の機会に感謝です。（鈴木恵子）



発音を「治す」ってどういうこと？どうやるの？

ごく簡単に説明します



発音の練習に入るお子さんは、頭の中で言おうと思った音を、違う音で発音しています。多くの場合、自分では正しく言っていると思っています。

発音を治す「構音訓練」は次のように段階を追って進めます

注目メモ

発音には舌、あご、唇の細かい動きを必要とします。十分な運動発達と、よく聞きよく見る力が求められます

第1段階. 基本動作から目標の音を導き出す:

最初に、目標の正しい音の発音を可能にするための基本動作を誘導します。この動作は、お子さんの症状によってさまざまです。カ→タの場合は口を大きく開けて「ン」の音を出すなど。

第2段階. 1音(音節)で何回も言う練習:

1で目標音の発音が可能になったら、何度も発音し動作に慣れます。この時、ことばの中にある「カ」の音と気づかせないことが重要です。

第3段階. 前後に他の音をつけて、無意味な音節連続の中で練習:

目標音をことばの中で使うための下準備として、前後に他の音(多くは母音)をつけて、意味のない音節連続の中で繰り返し発音して、発音動作を安定させます。いわば、ピアノの指練習、野球の素振り練習の段階です。

第4段階. 単語の練習:

良く知っていることばの中で、正しい発音動作を使いはじめます。正しい音がここで初めて、日本語のことばの中にデビューします。

第5段階. 句・短文・文章の練習:

より長いことばの中で正しい音と言えるように「カラスがカーカー」「カッコいいカメラをかったよ」と徐々に長い音の連なりの中で、繰り返し練習します。楽しい詩や絵本を覚えるまで読んだりもします。

注目メモ

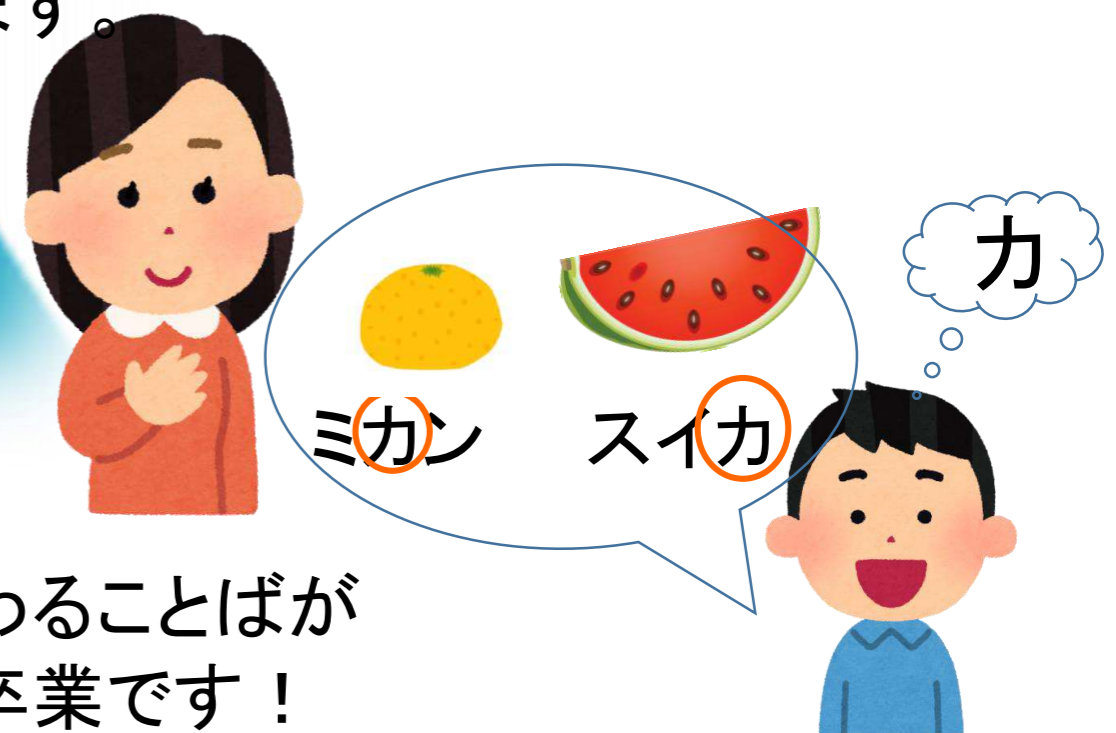
私たちの正しい発音は、それを自分で聞くことで保たれています。訓練では、発音動作の練習と並行して、お子さんが自分の発音の正誤を聞き分けることを早期から促します。

第6段階. 会話の中で使いこなす練習:

どこでもいつでも正しい音と言えるように、短いスピーチ、なぞなぞゲーム等々、さまざま自然な発話場面を設定します。第5段階で文章を流ちょうに言う練習が十分できていると、この段階はすんなり進みます。

注目メモ

訓練のどの段階においても、動作が安定するには何度も反復する必要があります。飽きずに反復練習するためには工夫がいります。STもお子さんも頑張ります!



いつでもどこでもみんなに伝わることばが話せるようになったら練習は卒業です！よくがんばりました。おめでとう！

